

## あの日あの頃 - 10

山口義子

今から十数年前のお話を致しましょう。学校には校舎と体育館にそれぞれ屋上がありました。校舎の屋上には、音楽室がポツンと真中辺に建って、窓には金網がめぐらされていました。雨の日は、相々傘で音楽室に通いました。ある晴れた日、「こんなによい天気教室にくすぶっているのはもったいない。屋上へ行こう。」防災ズキンの袋に教科書を入れて国語の朗読会をしました。四時間目終了のチャイムを待ちかねて「今日は遠足に行こう。」とパン券の籠、やかん、ショルダ―を肩に、屋上でお弁当も食べました。「あっ、先生、お弁当を忘れてしまいました。」「私あげる。」「私も、私も……。」悩む事はありません。級友のおかげで山の様な豪華弁当を口にした友達は少ないのです。私のものはあなたのもの、あなたのものは、私のもの。今も時々みかける星美ファミリーの一コマでした。

三階には図工室がありました。傷つき汚れた机が鎮座していました。一、二学期には、ほとんど描画の勉強、三学期には工作がありました。久田先生の児童画論は、個性あふれるものでした。その頃、聖堂は、体育館の中二階にあり、事ある毎に聖堂にかけ込むのは、いささか困難でした。子供達が帰った後、心静かに祈るには適していました。時折、シスター方のお祈りの時間にご一緒すると、静けさが身内にあふれてくるのです。シスターの服装も、額と首は白い布で隠しておられ、ベールも長いものでした。身体中で出ている所は手先と足首から先だけでした。合宿等の山歩きは、さぞかしご不自由だったろうと思います。

三年生は山中林間合宿があり、かまぼこハウスなるもので食事をしました。四年は伊豆弓ヶ浜での海浜学校です。(二年後に安房小湊に代わる。)五年の尾瀬、六年の志賀と夏の合宿でした。夏の尾瀬登山では、雷雨におびえました。尾瀬ヶ原から鳩待峠への坂道を、雨に打たれ疲れ果てて登りました。ご一緒したダルフィオール神父様は、足が前に出ないと投げかれ、子供にも「ゆっくり行こうよ。」とおっしゃる始末。しかし雷に会う事を考えると山道をのんびりとは歩けません。息をきらしながら英語の松本先生と、「間をあげないで、がんばって。」と追い立てました。峠からホテル迄のバスの中で疲れ果てていたのは神父様と担任だけでした。一時間程の道程を絶え間なく元気な歌声が響いたのでした。高原の赤トンボが群れ飛ぶ中、草笛を鳴らしたり、トンボを追いかけたりしました。又、片品川の川原では、トレパンのすそをたくし上げて水遊びをし、スイカ割りもしました。川におぼれる人はいませんでしたが、水かけっこをして、びしょぬれの人はいました。夜のボナノッテのあと、大広間で「ホームシックの人、寄っていらっしやい。」「ハァーイ。」返事とは裏腹の元気な声と笑顔が全員かたまっ、おだんごになりました。何故かその時の写真は、全員笑顔で、先生も子供も区別が付きにくいのです。六年生では五月静岡御前崎方面へ修学旅行に行き

ました。浜岡砂丘では「ヨーイ、ドン。」砂の上の徒競争。みんな一等目指したはずなのに、ほとんど同時にゴールインし、結局、皆が一等に到着。三保ランド、登呂道跡等を見学し、香ばしい茶の香りに引かれて?茶つみ、工場見学でした。緑のうねを印象的な絵に仕上げた人もいました。星美の常設美術館(四階の図工室)に随分と長い間展示してありました。確か、最後の修学旅行になってしまったからでしょうか。話がコロッと変わって申し訳ありませんが、少し昔、(二十年位前迄かしら、)定かではありませんが、同窓生の素晴らしい絵が毎年何枚かずつ残されています。ご存知でしたか。いつか皆様と一緒に鑑賞できるとよいですね。修学旅行のおみやげは、一様に「新茶」でありました。志賀高原合宿では、夜、コートを着て各自懐中電灯を持って、石の湯迄、ゲンジボタルを見物に行きました。こぼれそうな星空を、プラネタリウムのように、評した子もいましたが...。夜空の星が、地上に舞い散った様なホタルの群でした。志賀山、裏志賀の縦走もしました。短い足を、一杯に開いても一段登るのがやっとの志賀山道。おしまいには両手をついて、はい登りました。さらに下山ともなると悲惨です。ちょうど雨上がりの日でしたから、すべること。地球と仲良くおしり合いになった人も何人かいました。入浴時には、アザを数えあったことでしょう。又、木戸池の笹で草笛を作ったり笹舟を浮かべたりしました。これらの合宿の楽しみの一つにおやつがあります。これは、前の杉村校長様も、今の吉田校長様も、多忙の間をさいて、おやつを選び、ご自身で買い求めて下さいます。その時の子供の好み、流行のお菓子を、何故かよくご存知なのです。おやつを手にした子供の歓声は、かつて、そして今もずっとこだましています。星美ではよく、いろいろな宗教的なお祝い日に、プレゼントをいただきます。ある時はお菓子、ある時はおメダイや御絵などです。私の小学校時代と比べて、学校の校長様からプレゼントをいただくなんて信じられない事でした。でも、それだけに「星美の子は幸せだな、こんなに愛されていて。」と思います。

発表会も、あの頃は、運動会、音楽会、英語発表会、宗教発表会とありました。宗教発表会では、二十六回生が二年の時(まだ男女が一年から別クラスでした。)A組は「ご復活」の劇をしました。シスター平野に宗教専科をしていただきましたが、劇は男子だけで、マリア様、メイド役もしたのです。ちょっと出来映えが良かった?のか、丁度、サレジオ会でポーランド出身の新司祭誕生という次第でお祝いの集いに参加しました。教皇様にポーランド出身のヨハネ・パウロ二世が訪日された頃でしたので注目のポーランド、という事もあったのでしょうか。話は前後しますが、運動会では、林田先生率いる器械体操クラブがその妙技を披露し先生の模範演技に、子供達は熱いため息をもらし、高学年女子には初恋を味わった人も何人かいたようです。創立二十周年の大運動会では、お母様方と教職員が花がさ踊りに挑戦し、放課後体育館で、手を取り合って練習に励みました。当時、低学年では合科学習を取り入れ、砧緑地公園や碑文谷公園などに出かけました。遠出にはスクールバスを使いました。砧で、一年生(二十回卒業生)は喜びのあまり、「校長様一結に遊びましょ。」と、杉村校長様の手をとり、丘にかけ登っていきました。何故か校長様の手さげバックは、私の手の中に残っていたのです。その時、隣のクラスのシスター平野に、校長様は心臓が悪い

のよ、とたしなめられてしまいました。ご自分の身体の調子が悪いのに子供の喜びを共に喜んで下さった校長様の姿に深く教えられました。

学校の様子といっても、一人一人のエピソード、先生方の思い出は鮮明ですが、建物は中の増改築が毎年行われ、ほとんど今の姿があたり前に思えて、はっきりとしません。ちなみに三階図工室が四階になり、特別教室が立派になったのは、二十二回卒業生が四年生の時だそうです。「あの日あの頃」を書くにあたり、十八回卒業生と思い出話に花を咲かせたものの個人個人のエピソードが次々と飛び出し収集つかなくなりました。結局古いページをひもとして、自分の担任した学年の思い出になりました。十数年ぶりに再会した少女達は立派な婦人になり各々個性を發揮して生きています。配偶者募集中の人もたくさんいます。どなたか是非立候補お願い致します。人物については、私が保証します。

容器は変わっても星美の学園はドン・ボスコの教育精神に生きています。百聞は一見にしかずです。そうそう、今は同窓生二世の卒業も多くなっています。私も二世を是非教える身分になりたい。あと何年待てばよいのでしょうか。皆さん、頑張ってください。ではまた。

【同窓会報、第10号・平成3年1月1日発行・から転載】